

---

# 蠅狩り【三語即興文】

和波智淳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蠅狩り【三語即興文】

### 【Nコード】

N6566E

### 【作者名】

和波智淳

### 【あらすじ】

制限時間30分のはずが、やっぱり4時間以上かかってしまった三語即興文です。お題は「脳みそ」「信頼」「跳梁跋扈」。

「あんなあ、へえ。この部屋、何や知らんけど、ものすごく暑いんやけど……聞いてる？」

「うっせえ。俺は今忙しい。後にしろ後に」

部屋の隅から話しかけてくる奴を俺はばっさと切って捨てた。こっちはそれどころじゃないってえのに、相変わらず空気の読めない奴だ。つーか、部屋の中でもわざわざ日の当たらない暗い場所を選んで居座ってるくせに、暑いも何もあるか。じゃあ冬も夏も体操着ジャージ一丁で過ごしてるお前はいつたい何なんだと問い詰めてやりたいが……あいにく、今はそれどころじゃない。

すいーっと飛んでくる小さな黒い点が視界に入る。はっしと八工叩きを床に叩きつける。すかさず八工叩きを裏返して確かめるが、何もついてない。……畜生、逃げられた。

「あんなあ……」

「またかよ、何だよ」

「お取り込み中、ほんまにすまんけど……暑いし、窓、開けてもらわれへんやるか？」

「自分でやれよ、自分で。つーか、さっきから思うんだがなんで解けるんだお前は。とっとと人型に戻らんか、とっとと」

俺が八工叩きを振り振りそう言ってるやると、部屋の隅の塊はもぞもぞ動いて、いや、そやけど……とか何とかまたぶつぶつ言った。

その格好は、青っぱいというか黒っぱい髪の毛が、一抱え分ほども積み重なって絡まって塊になったような……とでもいうより他に形容しようがない。当然、どこから喋ってるのかわかんぞ想像もつかない。つか、これが普段は人型をしているということ自体信じられない。一張羅の体操着も当然ながら影も形もない。しかし、それにしても何でこいつは人型を解いてるんだ。まさか暑さのあまり溶けたとでも言うつつもりか？

いや、しかし奴も一応、人間の部類には入るんだよな。というかハイブリッド・マン・シンクン生機融合体なんだよな。ということは、あの髪の毛みたいな疑似神経の塊のどこかに、奴の生身の脳みそが入ってるはずだ。ということとは……この状態で、もし俺がまかり間違って奴を踏んづけるとか、ずつ転んで奴の上に倒れるとかしたら、いくら奴の体が丈夫だったって、脳みそのほうはひとたまりもないはずなんだが。それが分かかって俺の前であの格好になるってことは、信頼されてんだかされてないんだか。ま、奴のことだから単に何も考えてないだけだと思っけど。

そんなことより今はコバ工退治だ。最近暑くなってきたせいか、ちよつと食料を室温で放置すると、すぐ悪くなるようになった。悪くなるだけならまだいいが、問題はコバ工だ。去年のこの時期、油断して冷蔵庫の外に置き忘れた野菜が腐って溶けて、その臭いに釣られたらしいコバ工が俺ん家の中で大量繁殖した。それを発見した家事担当のリヴァイヴァが怒り狂ったのはもちろんだが……俺だつてあんなもん二度と見たかない。無数のちっこい蛆ウジがごによごによごによごによ床やら壁やらゴミ箱の上やらを這い回り、おまけに至る所にそいつの蛹かみかみがひつついてる状況なんて……。それに比べりゃ、この髪の毛みたいな生機融合体のほうがよっぽど見た目がいい。

だから、何があるうと奴らが我が領域に跳梁跋扈するのを見過ごすわけにはいかない。親虫だろうがウジだろうが蛹だろうが、見つけ次第、徹底的に叩き潰す。……その覚悟で、さつきから人がハエ叩きを持って目についたコバ工を追っかけ回してるというのに、まったく、この空気の読めない生機融合体ときたら……。

「どーでもええけど……」

……また話しかけてきやがった。

「何？」

思いつきり不機嫌な声で返事しながら振り向いてやったら、青黒い疑似神経の塊の中から、まるで腕みたいに細長く絡みあった束が一本、ひよいと持ち上がった。そうして、奴はひよろひよろとその

「腕」を振りながら

「普通サイズの八工叩きで、コバ工叩くんは無理やないかと思う……」

と、醒めてるんだかだるいんだか分からん口調で、一言。

「……んあああつ！ 今さらお前に言われなくたって分かってるよんなこたあ！ けどしょうがねーだろ、せつかく八工取り棒も出したってえのに八工はくつつかねーし、手で叩いたって全然叩かんねんだから！ だったら手で叩こうが八工叩きで叩こうが同じだつっーの！」

「何や、分かったような分からんような理屈やなあ……」

苦笑してるのか呆れてるのか分からん口調で言いながら、奴はまた疑似神経の「腕」をひよろひよろと動かし やにわにカメレオンが舌を伸ばすように、そいつを一メートル近い「触手」に変貌させた。

……俺は見てしまった。空中を飛んでいた小さな黒い点 たった今まで俺が追っかけていたコバ工が、ぐわつと先端を数本に分裂させた奴の触手につかみ取られる 否、「呑み込まれる」のを……。

「……これで、確実に一匹は減ったんと違うかなあ」

何事もなかったようにしゅるっと触手を収納して、奴はまことのんきな声でのたまった。

「……お前な……やっぱり早く、人間に戻れ……」

俺は、用済みになった八工叩きを無意識にぎゅっと握りしめていた。……今ここで、奴を袋叩きにしてやるべきかどうか、少なくとも六割以上は本気で検討しながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6566e/>

---

蠅狩り【三語即興文】

2010年10月8日15時55分発行